

## 〈巻頭言〉

# 新しい幼児教育をめざして

黒田 成子

昭和六十一年九月に幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議から「幼稚園教育の在り方」が出された時は新鮮な驚きと共感をおぼえた一人である。翌六十二年十二月に発表された教育課程審議会の答申に前述の「幼稚園教育の在り方」の視点がそのまま生かされていることを知ってさらに安緒感を感じた。

しかし、これからいよいよ日本の保育も変わっていくだろうと思う反面、正直に言う又何を「今さら」という思いも無いとは言えない。「今さら」と思うのは、真の幼児教育をめざして進みつつある園も既にかなりあるからではないだろうか。

幼稚園教育要領が近く改訂されることになっている。

これは画期的なことであるのに現場は意外に静かである。もっとも関心がたかまるのはこれからかもしれない。

現場の各園の実情は、たとえば意図的に教科的な面に重点をおく園があったり、特に六領域にこだわる園があったり、さまざまである。筆者の幼稚園でも昭和四十年代から遊びの保育をしてきたが十年位前まで指導計画は一応六領域で立てていた。それとはおよそ反対に実際は遊びの保育を展開し、その矛盾をいやというほど味わった。その後、保育者集団での話し合いを重ね、保育の活性化をはかった。昭和五十九年度からは子どもの成長の節目、ならびに園の諸行事を考え合わせ、一年を六期に

区切り、それぞれのねらいや内容、評価を行なうようになったが、今でも模索中である。

しかし、昭和六十五年からわが国の幼稚園教育要領が改訂されることは新しい幼児教育に徹することが可能となり、いわば一種の大義名分ができることとなり、おおいに評価されることである。

現場の保育にたずさわる者ばかりでなく、入園する幼稚園を選ぶのに「これでいいのか」と迷っていた子育て中の母親たちも、新聞等で幼稚園教育の新しい在り方を知って「迷いがふつきた」「やっぱりこれでよかった」という声が聞かれたりした。

且て昭和三十年代に誰も彼も六領域に走ったことを思い出すが、六十年代の今回も新しい方向に皆が走るだろう。しかし新しい教育要領に照らして保育を変えていくことは容易なことではないと思う。

改訂に出てくる「遊び」「自発性」「意欲」などのことばの共通理解を互に持つだけでも大変なことである。用語の分析をしたり、安易に新企画を立てるだけでできる

ことではないと思う。他園との交流や、現場研究はもとより、よほどの発想の転換と柔軟性、将来への見通しと保育実践における継続した努力が必要である。このために管理者だけでなく、保育者集団全員も一つとなって自分たちの保育を見直していくことが不可欠であろう。

幼稚園は子どもの遊ぶ場であり、しかも自由に遊ぶところである。しかし自由は身勝手にいうことではなく、まして休憩時間のようなものでもない。倉橋惣三は「幼児等は少しの自由を与えれば、すぐ満足します」と彼の名著「幼稚園真諦」の中で述べている。少しの自由ではあるが、満ち足りた純粹な自由を意味しているのであろう。今、子ども達に欠けている「主体性」や「人の関わり」も「意欲」も、ほんものの自由を土壌として育まれるべきものであると思う。

新しい教育要領がこんどこそ眞の幼児教育への明かるい道しるべとなり、皆で進むことができるよう期待したい。

(武蔵野相愛幼稚園)